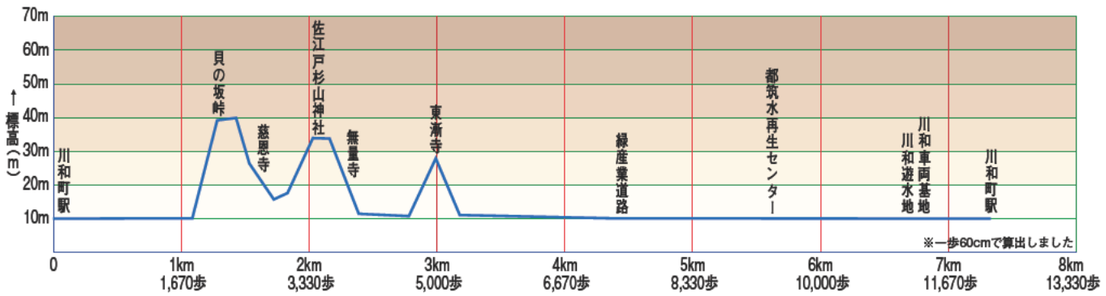
川和・佐江戸の歴史を訪ね、鶴見川を歩くコース



① 川和教会（平成29年に移転）

大正14年(1925)、横浜山手の共立女子神学校が、当時農村であった川和に婦人伝導者を派遣し、中山恒三郎、中山幸三郎兄弟の貸家を借りて日曜学校と礼拝をおこなったのが最初である。

② 貝の坂の旧道

中原街道と大山街道に挟まれた日野往還の川和に都筑郡役所が置かれ、明治29年(1896)に貝の坂が改修される前までは、このあたりは山超えの道であった。佐江戸側には峠の茶屋があったといわれている。

③ 土府根薬師堂

天正18年(1590)小田原落城の際、支城の小机城家老が薬師像を背負って川和に逃れ、千代橋際に奉安した。その後、鶴見川の洪水や貝の坂の上麻生線の道路拡張により、この地に奉安された。

④ 佐江戸杉山神社

祭神は五十猛命、例祭は9月27日。境内には佐江戸町内会館と神楽殿がある。その他日露戦争従軍碑、御嶽三柱大神の碑がある。本殿は関東大地震で倒壊したが再建された。周囲の大木に歴史を感じる。

⑤ 無量寺

高野山真言宗で、本尊は阿弥陀如来。開創年は鎌倉時代後期(1299頃)の歴史のある寺で、都筑の南部で最も古いといわれている。墓地には佐江戸城を築いたといわれる猿渡内匠助の墓がある。寺の参道は中原街道に面している。

⑥ 佐江戸の寺子屋

幕末から明治にかけて佐江戸では、小川金蔵により寺子屋が開かれ、農民の子どもたちが、読み書きそろばんを学んでいた。小川家には当時の文机や教科書が残っている。39ページ参照。【非公開】

⑦ 東漸寺

高野山真言宗、本尊は不動明王。天平年間(729～749)に行基が開山。一旦は廃寺になったが、永享12年(1440)に再興。本堂の左手に「三人寄れば文殊の知恵」といわれる文殊菩薩があり、知恵の仏様として知られている。墓地に佐江戸領主竹尾佐五左衛門元孝の墓がある。

⑧ 江川せせらぎ緑道

都筑水再生センター(汚水処理場)の高度処理水が、街に潤いを与えながら流れる江川せせらぎには、鮒や鯉が泳ぎ、岸辺には四季折々の花が咲く。

⑨ 川和車両基地・遊水地

基地には市営地下鉄グリーンラインの車両整備、設備保守、車庫としての役目があり、17編成68車両を収容できる。見学は、団体申し込みを随時受け付けている。基地の地下には、鶴見川の流域を水害から守るための遊水地(神奈川県管理)が設けられており、これは全国初の取組みである。

川和の菊

明治後期から昭和初期にかけ、横浜の近郊農村の中で「川和の菊」は有名で、毎年11月1日から1か月にわたって菊園が開放され、東京からも多くの人が訪れた。周辺の小学校でも、秋の遠足で川和の菊を見に出かけたと言われている。

川和の歴史

明治12年(1879)川井(旭区)から都筑郡役所が川和に移転してから、周辺地域の政治・経済の中心地として栄えた。昭和14年(1939)に横浜市港北区に編入され、港北区川和出張所が設置された。その後、昭和39年(1964)に出張所から支所となり、昭和44年(1969)に港北区から分区して緑区が誕生し、これまでの支所に緑区役所が置かれた。しかし、昭和47年(1972)に緑区庁舎が中山に移転すると、これまでの地域の中心的な役割は薄れ、続いて緑警察署、郵便局、土木事務所も中山に移転するに従って、かつての行政の中心地としての役割も薄れていった。

昭和初期の川和町
中央の建物が警察署、右奥が郡役所